

英米文学史にみるエコロジカルなモチーフ

人間と動物の共生

鈴木元子

The Ecological Motif in English and American Literature

Symbiosis of Humans and Animals

Motoko SUZUKI

昔から自然を称える文学作品は多かった。最近、しかし、また違った観点から、自然に対する関心が寄せられているようである。古代の人たちが自然を、畏敬の念を持って眺めたのとは一風違って、現代という世紀末に、自然がある面では末期症状を呈するようになり、これまでのような征服の対象ではもうなくなったからであろうか。ある生物は絶滅の危機にあり、緑豊かな森林は禿山と化し、そこに住む人間もはやその悪影響を免れるものではない。人間を包み込む自然が、すなわち地球という器が犯され、呻吟し始めていると言っても過言ではない。そこで、地球を単なる器としてではなく、地球をひとつの有機的生命体(ガイア理論)と捉える人々も出て来ている。

このように、自然に対する見方そのものが変化しつつある現代にあって、再度文学の世界に帰り、人間と動物がどのように描かれてきたかについて考察することは無意味ではないだろう。米文学においても、「アメリカン・ネイチャーライティング」という文学ジャンルさえ生まれてきている。英米文学史における主な作品から、人間と動物の共生に関わる作品を取り上げ、その特徴と時代性を探っていくことを本論の目的としたい。

・英国ロマン派詩(18世紀末)

コウルリッジ

サミュエル・テイラー・コウルリッジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)は、ワーズワース(William Wordsworth, 1770-1850)より2年遅れて、英国の西南に生まれた。父は田舎の牧師であった。

彼の代表作 *The Rime of the Ancient Mariner* (『老水夫行』、1798)ⁱⁱ は、英文学史にロマン主義復興の時代をもたらしたワーズワースの *Lyrical Ballads* (『抒情歌謡集』、1798)ⁱⁱⁱ の巻頭を飾った詩である^{iv}。

詩の構成はたいへん明瞭で、7部から成っているが、勿論これは7が完全数を表すところから

来ているのであろう。第一曲「罪の発生」、第二曲「罰の到来」、第三曲「魂の苦悩」、第四曲「贖罪愛」、第五曲「悪魔の敗北と天使の助力」、第六曲「懺悔」、第七曲「新生」の内容で、第七曲を除いては各曲ともその最終行にそのテーマを謳いあげている。

第一曲は、老水夫が、婚礼の祝宴に行く途中の若者を引き止め、物語を語り出すところから始まる。彼の乗った船が、嵐のために南極に流され、氷に閉じ込められた。氷一面の世界、何ひとつ生きるものがない世界にあって、霧雪の中、飛んで来たアホウドリは船員たちに多に歓待された。“ At length did cross an Albatross, / Thorough the fog it came; / As if it had been a Christian soul, / We hailed it in God's name. ”(63-66) 「終に一羽のあほうどりは、霧の間を飛び来り、キリスト信者の魂なる如く、聖名においてぞ迎へられぬ。」^v この表現には、聖書の影響が見受けられる。洗礼を受けたイエスの頭上に、天から降りてくる聖霊は、鳩に喩えられている (“ And Jesus, when he was baptized, went up straightway out of the water: and, lo, the heavens were opened unto him, and he saw the Spirit of God descending like a dove, and lighting upon him: ” *Matthew* 3:16)^{vi}。また、ノアの時代に、洪水後に箱舟から放たれた鳩が、その嘴にオリーブの青葉をくわえて戻ってきたとき、ノアは地上から水が引いたことを知ることができた (「創世記」 8:11)。そこで、鳩は平和と希望の象徴と見なされるようになった。その物語同様、大自然の海鳥は船員たちに希望を与え、実際、船員らにもよく懐いていたと言う。ところが、この吉兆と見なされたアホウドリを何の理由もなく、老水夫が射落してしまうのである。それは第一曲最後の二行 “ With my cross-bow / I shot the ALBATROSS! ” (81-82) に記されている。

老水夫は、この時、一体どんな気持ちに駆られて、吉鳥を射ってしまったのだろうか。下記の部分である。

In mist or cloud, on mast or shroud,
It perched for vespers nine;
Whiles all the night, through fog-smoke white,
Climmered the white Moon-shine.

‘ God save thee, ancient Mariner !
From the fiends, that plague thee thus !--
Why look'st thou so ? ’ (75-81)

これらの詩行から読み取れるのは、自然の美しいものに対する、人間の野蛮さや傲慢、征服欲ではないだろうか。あるいは、人間以外の生き物に対する嫉妬と言ってもよいかもしれない。迂闊な行為であった。

その罪業の結果、第二曲で、“ And I had done a hellish thing, / And it would work 'em woe; / For all averred, I had killed the bird / That made the breeze to blow. ” (91-94) とあるように、アホウドリ殺しが原因となって船は航行困難に陥る。そして、“ Instead of the cross, the Albatross / About my neck was hung. ” (141-142) と謳われているように、その罪に対する罰の印が主人公自らの首に掛けられたのである。呪いを受けた船は北方へ流れ、終に赤道に達する。

船はもう動かず、停止しているうちに、幽霊船が現われ、他の乗組員は全員渴いて死ぬ (第三曲) “ The souls did from their bodies fly, -- / They fled to bliss or woe! / And every soul, it passed

me by, / Like the whizz of my cross-bow! ”(220-223) アホウドリを殺したことが、その船員全員の共同責任とされたかのようである。すなわち、自然に対する冒涇と殺害の罪の結果は、人間の滅亡という形で支払われなければならないのか。

しかし、そのような苦境にあっても、水夫自身は死ぬことも赦されず、生き地獄が続いていく(第四曲) “ The many men, so beautiful! / And they all dead did lie: / And a thousand thousand slimy things / Lived on; and so did I. ”(236-239) ここで、コウルリッジは、このように注を付けている。 “ He despiseth the creatures of the calm, And envieth that *they* should live, and so many lie dead. ” つまり、この時まで、老水夫は人間の命は尊いけれども、それに比べれば海の生き物の命ははるかに低い、という見方をしていたことを吐露している箇所である。

彼は、「死中の生」を生き、孤独なる生に苦しみ、月や星を羨み、呪いの中に身を沈めていた。ところが、ある晩、静まった海原に住む、神の被造物を見るのである。それは、海蛇であった。アホウドリを殺した晩と同じ白い月明かりが、辺りの世界を照らし出しているときであった。このとき、水夫はその美しさ、ある種の感動を覚える。

Beyond the shadow of the ship,
I watched the water-snakes:
They moved in tracks of shining white,
And when they reared, the elfish light
Fell off in hoary flakes.

Within the shadow of the ship
I watched their rich attire:
Blue, glossy green, and velvet black,
They coiled and swam; and every track
Was a flash of golden fire. (272-281)

自然の神秘的な美しさは、神の聖なる創造無くしては考えられないほどの、眩い grandeur さえ有していた。水夫の心に、終にはこの海蛇に対する純な愛情すら湧き出してきて、その海の生き物を思わず祝福してしまうのであった。

O happy living things! no tongue
Their beauty might declare:
A spring of love gushed from my heart,
And I blessed them unaware:
Sure my kind saint took pity on me,
And I blessed them unaware. (282-287)

水夫はここで、単に一動物に驚嘆したのではなく、その背後に存する創造主を垣間見、畏敬の念を禁じ得なかったのではないか。そして、そういう自分、神の被造物を無意識に祝福している自分を見出すと、今度は、他の動物を愛し、祝福できるのは、聖人が彼を憐れんだからだ

と理解する。神に創造され、人間が未だ墮落せずに樂園にいたとき、その時の純粋な心を取り戻すことができた、と理解するのである。

そこで、とうとう彼は、今、神に祈ることが出来る。“The self-same moment I could pray; / And from my neck so free / The Albatross fell off, and sank / Like lead into the sea.” (288-291) 首に掛かっていたアホウドリが、鉛のように海深く沈んで行ったという詩行に、罪の赦しが示唆されている。

第五曲の最後においては、船は天の軍勢と南の精の助けを借りて、陸の方へと流れていくが、しかし水夫には、罪無きアホウドリ“*The harmless Albatross*”(401)を弓で射って殺した罪悪の償いが残される。“*The man hath penance done, / And penance more will do.*”(408-409)

第六曲では、老水夫の昏睡状態下に船は北方に運ばれ、目覚めたときには、掛けられていた呪いも解けていた(“*And now this spell was snapt:*” 442)。彼は生きて故国を見ることができた。おだやかな港、入り江を照らす月明かり、岩の上に立つ教会堂。“*The rock shone bright, the kirk no less, / That stands above the rock:*”(476-477)この詩行にもキリスト教の匂いを嗅ぐことが出来る。聖書において岩は不動の基礎の形容とされ、イエス自身、彼の言葉を聞いて行う者は岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ていると教えている(マタイ7:24)。また、イエスは一番弟子のペトロに向かって、「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。」(マタイ16:18)と告げている。そこで、水夫が意識の朦朧とした中、故郷の岩の上に立つ教会を見上げるが、それは救いの確かさを象徴している。さらに彼は、一人の善良なる隠者が、聖なる讃美歌を歌っているのを聞くことになる。“*He singeth loud his godly hymns / That he makes in the wood. / He'll shrive my soul, he'll wash away / The Albatross's blood.*”(510-513)隠者は神の代理者の如くに、老水夫の罪を赦し、流した血を洗い清めてくれることだろう。

最後の第七曲においては、舞台は第一部の婚礼の宴に戻る。“*Farewell, farewell! but this I tell / To thee, thou Wedding-Guest!*”(610-611)老水夫は自らの奇異なる体験を語ることによって、神の真理を人々に伝え歩いていたが、彼が獲得した真理とは次のものであった。

He prayeth well, who loveth well
Both man and bird and beast.

He prayeth best, who loveth best
All things both great and small;
For the dear God who loveth us,
He made and loveth all. (612-617)

神が創造され愛されている万物を、人もまた愛し敬うべきである。

コウルリッジの *The Rime of the Ancient Mariner* は、英文学史において、神秘的超自然の世界を描いた、そこには、幻想的、怪奇、神秘的 gothicism の雰囲気さえ漂うと評されているが、エコロジーの観点からはどうであろうか。一人の人間が、自然を何の理由も無く殺傷していくその悪魔的なわざは、人類全体に呪いをもたらす。自分で自分の首を絞めるかの如くに、毒物・天災・核・公害等が身に降りかかり、死を招く。レイチェル・カーソンが、その著作、自然環境破壊の実状を暴露した『沈黙の春』^{vii}で警告しているようにである。結局、自然や生き物を愛し、

地球を愛することこそが、人間の生きる道であり、人類に幸福と平和をもたらす唯一の道であることをも語っているように考察される。

・アメリカン・ルネサンス（19世紀前半） ポオ

エドガー・アラン・ポオ（Edgar Allan Poe, 1809-1849）はロマン派詩人であるとともに、都会の読者を対象にした怪奇、幻想、風刺、海洋、疑似科学などの多様なジャンルにも挑戦した作家である。しかし、自然を愛したポオは、作品の中で美しい自然の光景をしばしば描いている。その中でも、ネイチャーライティングと呼べる作品に、“Domain of Arnheim”（『アルンハイムの地所』、1847）“Lander's Cottage”（『ランダーの屋敷』、1849）“Landscape”（『風景』）“The Elk”（『角鹿』、1844；“Morning on the Wissahiccon”、1843）を挙げることができる^{viii}。本論においては、動物と人間との関わりという点から、ポオが挿し絵画家チャプマンのエルク^{ix}の絵から発想したと言われる“*The Elk*”^xを取り上げてみたい。

冒頭でポオは、外国人旅行者、特にヨーロッパの作家たちを、アメリカの最も踏み均された場所しか訪れないと批判する。ところが、アメリカ本来の美は、観光地の外に足を伸ばさなければ到達できないのである。“In fact, the real Edens of the land lie far away from the track of our own most deliberate tourists”（157）と語り、アメリカの自然美は乗り物に乗って見て周るのではなく、徒歩“on foot”によると主張する。“- but on foot. He must *walk*, he must leap ravines, he must risk his neck among precipices, or he must leave unseen the truest, the richest, and most unspeakable glories of the land.”（158）如何に魅力的で素晴らしいエデンの園であったとしても、“risk”の語があるように、危険を冒すことが、アメリカの野生の風景を享受するためには不可欠であると言うのである。

作者はルイジアナ渓谷の美しさを説き、「自然の美しさに充ちたあらゆる広漠たる地域の中でも、この渓谷はおそらく最も美しい。最もたくましい想像力こそが、その溢れるばかりの美しさからいろいろの連想を引き出し得るのだ。」^{xi}と述べている。このように筆を進めつつ、ウィサヒコンのような殆ど誰にも知られていないような場所へ読者を誘うのは、アメリカの風景はよく知られた景勝地ばかりでないこと、知られざる自然の中でこそ作家のイメージーションが働くことを示唆したいからだろう。

旅行記者や作家にとって、処女地とも言えるウィサヒコンの自然の中に、ぼつんと一匹の角鹿が現れた途端、自然はもう物語の単なる装飾的背景ではなく、物語の主体として、点景的存在として機能し始めるのである。

詩人の想像界で、高尚なる野生の代表者エルクの傍らに立つのは先住民族、と決まっている。

I saw, or dreamed that I saw, standing upon the extreme verge of the precipice, with neck outstretched, with ears erect, and the whole attitude indicative of profound and melancholy inquisitiveness, one of the oldest and boldest of those identical elks which had been coupled with the red men of my vision. （161）

ところが、この作品は意外な展開を見せる。最後の落ちはこうなるのである。

Thus ended my romance of the elk. It was a *pet* of great age and very domestic habits, and belonged to an English family occupying a villa in the vicinity. (162)

実際、その大鹿はイギリス人家庭のペットで、それも逃げたエルクを連れ戻しに、黒人の使用人がやって来たというのである。人間の深層心理に横たわる大自然の原風景は、もうポオの時代には崩れ始めていたのか。

人間にとって、犯すべからざる大自然への畏怖と憧憬の念は、すっかり失せ果ててしまう。しかし、またそれと共に浮かび上がってくるシーンが、野生動物の飼い慣らしと、アメリカの風景それ事体の飼い慣らしと支配。自由と野生的精神の飼い慣らし、即ち道徳化。さらには、先住民や黒人を飼い慣らして平気なアメリカ、つまり人間性の剥奪への警鐘が、ここにかすかに聞こえてくるのである。

ソーロウ

ヘンリー・D・ソーロウ (Henry David Thoreau, 1817-1862) は、アメリカン・ネイチャーライティングの祖と考えられている。コンコードに生まれ、ハーバード大学卒業後小学校教師となり、また Emerson の *Nature* (『自然論』、1836) を読んで超絶主義に共鳴、生活を共にして機関誌 *The Dial* (1840-44) を発行。やがて町はずれのウォールデン湖畔に一人用の小屋を建て、2年程自給自足の生活をする。その間の瞑想、四季の移り変わり、文明批評、動物・植物日誌等を合わせたのが、*Walden, or Life in the Woods* (『森の生活』、1854)^{xii} である。その後も、自然観察と瞑想、それに基づく記録を仕事とした。また、彼は自然に対して愛情を持つだけに終わらず、人類愛に燃え、奴隷制度には強く反対した。具体的には、メキシコ戦争と奴隷制度に反対して人頭税不払い運動をおこし、1846年にコンコード刑務所に一晩収監されるが、その体験から *Civil Disobedience* (『市民の不服従』、1849、1866) を発表している。

Walden の12章 “Brute Neighbors” (『野生の隣人』) に、隣人としての動物についての記述がある。この “Brute” (野獣) とは、実際に彼の周りに出没する、“locust” “pigeon” “woodpecker” “hound” “lost pig” “otter” “raccoon” “wood-cock” “turtle-dove” “squirrel” “ant” “cat” “loon” “duck” で、どうみても小動物であることから、彼のユーモアと了解する。“Neighbor” という言葉には、聖書の「隣人」^{xiii} についての教えが含蓄されているように思える。イエスにとっての「隣人」とは人類のことであった。それもイエスの生きた社会にあっては、例えばユダヤ人と異邦人は一緒に食事もせず反目し合い、隣人でありえていなかったもので、その文脈からするとイエスが彼らの中垣を取り払おうとしたことは画期的な事であった。そこでソーロウが、子どもを愛し自然を愛したイエスの如しに、「隣人」を人間だけに限らず、動物や自然界全体に拡大したことも画期的な事であろう。ソーロウが森で小猫に遭遇したときの様子を、“The surprise was mutual.” (232) と書くとき、猫という動物と自分を同じ目線に置いていることが明らかである。また、ソーロウの野性観について、次のように、東山正芳氏が分かりやすく説明している。「野性は自由と生命力とが一つになったもので、自然の中には常に存在するものであるが人間はともすれば失いがちのものである。だから人間は常に自然と接触を保って野性という強壯剤をのんでいなければならない。いいかえれば世界は野性の中にその存在が保たれているといえる。このよ

うな野性の理念がアメリカの伝統的精神としてピューリタニズムと並ぶフロンティア・スピリットにつながるものであることは一見明白である。ソーロウは自然と人間との中にある野性をすくどくみつけて、それに親しみを感じ、それが充満してゆくことを願った。」^{xiv}

この12章で特徴的なのは、ソーロウが実際に蟻を人間の隣人と見立てて観察し、筆をふるっている点である。例えば、このような描写である。“...whose mother had charged him to return with his shield or upon it. Or perchance he was some Achilles, who had nourished his wrath apart, and had now come to avenge or rescue his Patroclus.”(229) “Why here every ant was a Buttrick, --'Fire! For God's sake fire!' - and thousands shared the fate of Davis and Hosmer.”(230) “Whether he finally survived that combat, and spent the remainder of his days in some Hotel des Invalides^{xv}, I do not know; but I thought that his industry would not be worth much thereafter.”(231)

赤蟻と黒蟻の死闘も、“the red republicans on the one hand, and the black imperialists on the other”(229)と、人間の対立主義者間の戦いになぞらえている。蟻の記述の最後の一文で、作者自身が「わたしの目撃したのは、ポークの大統領時代^{xvi}、ウェプスターの逃亡奴隷法案の通過前五年におこったわけだ」と書いているように、1840年代から50年代にかけてその兆候が現れ、後に南北戦争に発展する人間の争いを念頭に置いていたのであろう。しかし、だからと言って、ただ蟻を擬人化させて戦争の無残さを批判しているだけではないと思う。蟻の生々しい死闘の様子、足がもぎれたり、首が落ちたりの様は、自然界に生きる動物たちの生存競争の厳しさを表すとともに、その動物が我々人間からするとどんなに小さな動物であっても、そこに生き物の活力を見、そのエネルギーのすごさに、まさに“brute”であることを実感させられているのではないだろうか。

ソーロウが蟻の合戦について、“I never learned which party was victorious, nor the cause of the war; but I felt for the rest of that day as if I had had my feelings excited and harrowed by witnessing the struggle, the ferocity and carnage, of a human battle before my door.”(231)と総括するとき、人間が自然の中に生きていた時に元来持っていた力を呼び覚まされるようで興奮する、しかしまた、戦いという点では苛まれるという複雑な心境に陥らざるを得なかった。

章の最後は、「カイツブリ」[鳥]“loon”についてである。カイツブリはこのミル＝ダムの狩猟家みんなの射的であった。一羽のカイツブリに対して、十人の狩猟家が集まることもあったという。しかし、ウォールデンの住人であるソーロウにとっては、“making the woods ring with his wild laughter before I had risen”(233)とあるように、森の隣人で、彼の鳴き声は友人の「笑い」“laughter”^{xvii}であった。たまたまソーロウが池でカイツブリに遭遇した場面では、“While he was thinking one thing in his brain, I was endeavoring to divine his thought in mine. It was a pretty game, played on the smooth surface of the pond, a man against a loon.”(235)と記述され、共に遊び、共にゲームを楽しむ「遊び仲間」として表現されている。

カイツブリ観察の最後の一文は、こう記されている。

At length, having come up fifty rods off, he uttered one of those prolonged howls, as if calling on the god of loons to aid him, and immediately there came a wind from the east and rippled the surface, and filled the whole air with misty rain, and I was impressed as if it were the prayer of the loon answered, and his god was angry with me; and so I left him disappearing far away on the tumultuous surface. (236)

ソーロウは、「カイツブリの神」という表現を使っているが、森の小動物にもそれぞれ神が在るという、相手に敬意を払う発想は面白い。彼の思いやりは、あたかも他民族に対する思いやりのように暖かい。彼は、インディアンと白人とでは、考え方や文化が全く異なることを認め（例えば、年齢の数え方から年月の数え方まで違うように）、それをカイツブリにまで当てはめているようである。

彼が、自然を通して永遠なるものの存在を捉えようとしたことは、19世紀初の西欧ロマンティシズムの流れにトランセンデンタリズムを受けとめた時代精神の反映である。特にソーロウの場合、自然の中に入り、自然と直に接触するという実践を通して、それを追求しようとしたことが特徴的である。一日5時間をコンコードの自然の中で過ごせなかった日は、何か一日を浪費してしまったような感じを受けたらしい。自然と人間とは、相応ずる共通の性質を持っているから、自然との接触によって、生命力、肉体的・精神的活力をいただくのである。さらには、自らの本質的、理想の姿を、自然の中にこそ発見できると考えたソーロウは、まさにエコロジストの先駆者であったと言える。

・ 20 世紀アメリカ文学 ウォーカー

アリス・ウォーカー (Alice Walker, 1944-) は、フェミニズムと黒人問題を自己の課題としている作家で、その代表作 *The Color Purple* (1982) によりピューリッツァー賞と全米図書賞も受賞している。ここでは、“Am I Blue?” (*Living By the Word*, 1988 所収)^{xviii} を取り上げてみたい。ウォーカーはこの作品で動物の権利について訴えるが、それは強者に対する弱者の権利として、動物である馬に対する彼女の目には、黒人、先住民、女性や子どもら弱者に注がれる思いやりの気持ちと同じいたわりの心情が込められている^{xix}。

隣の家に “a large white horse” (86) が飼われているが、作者が最も気になるのは、それが、“over the five or so fenced-in acres” (86) に飼われていることである。この人間による動物の「囲い込み」は、アメリカ史において、白人が黒人を囲い込み、また白人がインディアンたちを囲い込んできた (“like animals”, 89) 事実を象徴し、かつ想起させるものである。また、古代から女性たちは男性たちに囲い込まれてきたとも表現できるであろう。作者は、アメリカ人男性たちが英語を話せない日本人女性、韓国人女性やフィリピン人女性と結婚して、最初は自分たちの結婚がどんなに祝福されているかと自慢していても、妻たちが英語を話すようになると、その結婚はたちまちに崩壊していく例をあげていて面白い。ここにも、強者としての男性が弱者としての女性を囲い込むこと、それがこれまでの結婚の仕組みであったことが語られている。

この馬に対する、その家の子どもたちの扱ひもまた横柄なものとして描出されている。“They would appear in the meadow, climb up on his back, ride furiously for ten or fifteen minutes, then get off, slap Blue on the flanks, and not be seen again for a month or more.” (86) たかだか十代の少年少女が、まるで奴隷に対する主人のように振る舞う。“ride furiously” や “slap Blue on the flanks” の言葉にはそれが示唆されていて、さらには、10分か15分間半狂乱のように乗り回したかと思うと、今度は一ヶ月以上も放っておくというのも、人間の身勝手さと傲慢さの良い例である。

この作品の特徴は、動物にも感情があることを作者が力説していることである。作者がりん

ごをあげようと近づいたときに、“he would whinny, snort loudly, or stamp the ground. This meant, of course: I want an apple.”(87)と、馬が自分の意志を人間に伝えようとしていると記述する。そこで、動物の感情や意志を無視して、或いは、そんなものは存在しないもののように、人間側の身勝手に動物を囲い込んでいることが、当事者である動物にとっては、如何に苦痛、不快なことか、と作者には想像されるのである。5エーカーくらいのところに入れられた馬は、さぞかし孤独であり、退屈であろう。

作者は、馬の目を見ることで、そこに動物の感情を読み取ろうとする。だから、雌馬が同じ囲いの中に入れられた後、作者は彼(馬)の目に、“a different look”(90)を認めるのである。そしてそれは、ブルーが種馬としての仕事を終え(人間の身勝手なビジネス)、雌馬が持ち主のもとに帰されたときに、馬の目を見るのを恐れる。そこに彼の表情が表現されているのを予感するからである。“I dreaded looking into his eyes - because I had of course noticed that Brown, his partner, had gone - but I did look. If I had been born into slavery, and my partner had been sold or killed, my eyes would have looked like that.”(90)

ここで、奴隷の家族が引き離される痛みと、妊娠した雌馬を引き離される雄馬の痛みとを重ね合わせている。確かに、動物としての感情があるだろうが、どこまで人間のそれと重なり合うのだろうか。しかし、それでも作者は、あくまでブルーを人間と捉えようとする。“Blue was like a crazed person. Blue was, to me, a crazed person. He galloped furiously, . . .”(91)飼主の家の子どもたちがブルーを“furiously”に乗り回していると書かれていたが、ここで再度“furiously”という単語が、それも今度はブルーの走り方に付けられているのを発見し、皮肉か、もしくはブルーにも人間と同じ怒りの感情が在ることを故意に示そうとしていると考えさせられる。

作者がブルーにりんごをあげるシーンがまた出てくるが、雌馬を失った後では、前回よりもっと動物と人間との境界線をぼかす形で、その悲しみが提示されている。

And then, occasionally, when he came up for apples, or I took apples to him, he looked at me. It was a look so piercing, so full of grief, a look so *human*, I almost laughed (I felt too sad to cry) to think there are people who do not know that animals suffer. (91)

作者は、“animals' rights”(91)についても言及しているが、それも、子どもの権利や女性の権利との絡みにおいてである。大人の男性たちは、子どもは驚かされるのが大好きで、女性たちは虐待されたり、レイプされるのが大好きだと信じ込んでいると同様に、動物たちも人間に酷使され、虐待されたがっているのを教え込まれているのではないかと、作者の憤りは沸点に達する。

ブルーの目に苦痛が現れ、それが絶望へと変化し、さらには人間に対する嫌悪となると、それこそが「野獣の目」になることを警告している。しかしながら、この残虐な人間たちは、我が家の前で走り回る「白い」馬に自由と平和を勝手に想像して、悦に入っている愚かな者たちである。

毎朝飲む牛乳にしても、その牛の暮らしぶりがどんなものかを聞こうとする者はいない。人間の食生活の必需品である牛乳は、その母体である「牛」とは切り離されたものとして、消費者に認識されているから。だから、作者は、ステーキを前に食卓についても、口に入れた一口の肉を吐いてしまう。

以上、四作品について、人間と動物の共生のテーマから、その特徴と時代性について論考してきた。それぞれの結論をここに重複することは避けるが、このエコロジーの観点からすると、これまで重要な作品とは見なされてこなかった作品についても、思わぬ価値があるのを発見して、興味は尽きない。もっと色々な作品について、読み直しと考え直しを試みてみたいという欲求に駆られる。

(注)

- i 地球科学的な観点から、地球を「生きた地球」として捉える地球像が提唱されるようになった。このモデルをその主唱者ラヴロックの命名に従い「ガイアのモデル」と呼ぶ。ガイアとは、大地の女神、地球の母なる女神ガイアである。地球を古代神話にならって女神になぞらえているのは、地球をひとつの有機的生命体と言ってよいほどに、擬人化して捉えているからである。地球は全体としてひとつの生命をもった生き物のように、自己の生きる条件をつくり、自動調節しているシステムだと見なすことができる。高木仁三郎『いま自然をどうみるか(増補新版)』(白水社、1998)参照。
- ii Coleridge's Poems, ed. by J. B. Beer (New York: Everyman's Library, 1963) .
- iii ワーズワースはその序文で古典主義の詩を否定し、日常の何気ない事物に靈妙さを見出す作詩をしている。
- iv その後1817年に他の詩集に入れるために大幅に推敲された。
- v 『コウルリチ詩選』斎藤勇・大和資雄訳(岩波書店、1955、1975)12ページ。
- vi 鳩は昔から早く人に飼慣らされたので、供犠に用いられ(「創世記」15:9)特に貧しい人々の捧げ物とされた(「レビ記」5:7、12:8、「ルカによる福音書」2:24)。また鳩の特徴から、無邪気さや平和を表すタイプともされた(「マタイによる福音書」10:16、「詩編」74:19)。そこから、鳩は聖霊の象徴ともなった(「マタイによる福音書」3:16、「マルコによる福音書」1:10、「ルカによる福音書」3:22、「ヨハネによる福音書」1:32)。
- vii Rachel Carson, *Silent Spring* (1962). レイチェル・カーソン『沈黙の春』青樹築一訳(新潮社、1974、1998)。
- viii Scott Slovic 編著、*Other Nations: Animals in American Nature Writing* (鶴見書店、1997)1ページ参照。
- ix エルクについては、ヨーロッパ・アジア産のヘラジカ(北米産のmooseより小さく、雄は掌状の大角を持つ)と、北米産のワピチ(雄は枝分かれた大角を持つ)を集合的に呼んでいる。エルクは一時絶滅が心配されたが、現在は頭数が回復し、灰色熊と共にアメリカに残る野生動物の代表的存在になっている。
- x *The Complete Works of Edgar Allan Poe*, ed. by James A. Harrison (New York: AMS Press Inc., 1965)156-162.
- xi 谷崎精二『エドガア・ポオ 人と作品』(研究社、1967)110ページ。
- xii Henry D. Thoreau, *The Illustrated Walden*, ed. by J. Lyndon Shanley (Princeton: Princeton University Press, 1973) .
- xiii 「古代バレスチナの人々は自衛のため聚落生活を営んだので、隣人との間柄はきわめて重要

であった。古い律法は、その間柄を破るすべての事件を防ごうとしたことを伺わせる。偽りの証言（出 20:16）詐欺（レビ 19:13）貸借について（申 15:2）地境について（申 19:14）裁判について（レビ 19:15）姦淫（レビ 20:10）隣人の所有を貪ってはならないこと（出 20:17）等がある。新約の時代にも、隣人関係は社会生活の重要な紐帯であった（ルカ 15:6、9）。隣人の概念は、イエスの大いなる戒め、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』（マタ 19:19、22:39）において、また よきサマリヤびとのたとえ（ルカ 10:36 - ）において、頂点に達した（レビ 19:18）。ユダヤ人は、隣人愛を同胞だけに通用するものと解したが、イエスは民族的限界を越えて、被造物なる人類すべてが、互いに隣人として仕え合うことを教えられたのである。」（『聖書辞典』新教出版社、1968、1984、322-3 ページ）

xiv 東山正芳 『ヘンリー・ソーロウの生活と思想』（南雲堂、1972、1977）94 ページ。

xv ナポレオンの墓所になっているパリの廃兵院。

xvi James Knox Polk（1795-1849）、米国第 11 代大統領（1845-49）

xvii “ when I was straining my eyes over the surface one way, I would suddenly be startled by his unearthly laugh behind me. ” “ unearthly laugh ” “ loud laugh ” “ demoniac laughter ”

xviii Slovic、86-92 ページ。

xix この作品の特色は、動物の権利だけに集中せずに、それを少数者や弱者の人権と絡めて描いている点にある。作品内に出てくる「ブルース」への示唆や「キルト」などは、アメリカに住む少数民族の文化の象徴でもある。

[1998 年 10 月 28 日受理]

